



半七捕物帳04

湯屋の二階

岡本綺堂



青空文庫



文庫 青空

ある年の正月に私はまた老人をたずねた。

「おめでとうございます」

「おめでとうございます。当年も相変わりませず……」

半七老人に行儀正しく新年の寿を述べられて、書生流のわたしは少し面食らった。そのうちに御祝儀の屠蘇とそが出た。多く飲まない老人と、まるで下戸げこの私とは、忽ち春めいた顔になってしまつて、話はだんだんはずんで来た。

「いつものお話で何か春らしい種はありませんか」

「そりやあむずかしい御注文だ」と、老人は額ひたいを撫でながら笑つた。「どうで私どもの畑にあるお話は、人殺しとか泥坊とかいうたぐいが多いんですからね。春めいた陽気なお話というのはまことに少ない。しかし私どもでも遣り損やじは度々ありました。われわれだつて神様じゃありませんから、なにか何まで見透しというわけには行きません。したがつて見込み違いもあれば、捕り損とじもあります。つまり一種の喜劇ですね。いつも手柄話ば

岡本綺堂

かりしていますから、きようはわたくしが遣り損じた懺悔話をしましょう。今かんがえる
と実にばかばかしいお話ですがね」

文久三年正月の門松も取れて、俗に六日年越しという日の暮れ方に、熊蔵という手先が
神田三河町の半七の家へ顔を出した。熊蔵は愛宕下で湯屋を開いていたので、仲間内では
湯屋熊と呼ばれていた。彼はよほど粗忽そそつかしい男で、ときどきに飛んでもない間違いや
出鱈目でたらめを報告するので、湯屋熊のほかに、法螺熊ほらくまという名誉の異名を頭に戴いていた。

「今晚は……」

「どうだい、熊。春になつておもしろえ話もねえかね」

半七は長火鉢の前で訊いた。

「いや、実はそれで今夜上がったんですが……。親分、ちつと聞いてお貰い申してえこと
があるんです」

「なんだ。又いつもの法螺熊じゃあねえか」

「どうして、どうして、こればかりは決して法螺のほの字もねえんで……」と、熊蔵はま

岡本綺堂

じめになつて膝を揺り出した。「去年の冬、なんでも霜月の中頃からわつしの家の二階へ毎日遊びに来る男があるんです。変な奴でしてね、どう考えてもおかしな奴なんです」

三馬の浮世風呂を読んだ人は知つていゝであらう。江戸時代から明治の初年にかけては大抵の湯屋に二階があつて、若い女が茶や菓子を売つていた。そこへ来て午睡ひるねをする怠け者もあつた。将棋を差している閑人ひまじんもあつた。女の笑顔が見たさに無駄な錢を遣いにくる道楽者もあつた。熊蔵の湯屋にも二階があつて、お吉という小綺麗な若い女が雇われていた。

「ねえ、親分。それが武士さむらいなんです。変じゃありませんか」

「変でねえ、あたりまえだ」

武士が銭湯に入浴する場合には、忌いやでも応でも一度は二階へあがつて、まず自分の大小をあずけて置いて、それから風呂場へ行かなければならなかつた。湯屋の二階には刀掛けがあつた。

「けれども、毎日欠かさずに来るんですぜ」

「勤番者きんぱんものだろう。お吉に思召おぼしめしでもあるんだろう」と、半七は笑つた。

岡本綺堂

「だって、おかしいじゃありませんか。まあ聴いておくんなせえ。去年の冬からかれこれもう五十日も毎日つづけて来るんですぜ。大晦日おみそかでも、元日でも、二日でも……。なんぼ勤番者だって、屋敷者が元日二日に湯屋の二階にころがつている。そんな理窟がねえじゃありませんか。おまけに、それが一人でねえ、大抵二人連れでやって来て、時々どこかへ出たり這入ったりして、夕方になるときつと一緒に繋がって帰って行く。それが諄くどくもいう通り、暮も正月もお構いなしに、毎日続くんだから奇妙でしょう。どう考えてもこりやあ尋常の武士じゃありませんぜ」

「そうよなあ」と、半七は少しまじめになつて考えはじめた。

「どうです。親分はそいつ等をなんだと思います」

「にせもの偽者かな」

「えらい」と、熊蔵は手を拍うつた。「わつしもきつとそれだと睨にらんでいるんです。奴らは武士の振りをして何か仕事をしているに相違ねえんです。で、昼間は私の家の二階にあつまつて、何かこそこそ相談をして置いて、夜になつて暴あらつぽいことをしやがるに相違ねえと思うんだが、どうでしょう」

「そんなことかも知れねえ。その二人はどんな奴らだ」

「どつちも若けえ奴で……。一人の野郎は二十三で色の小白い、まんぎらでもねえ男つ振りです。もう一人もおなじ年頃の、片方よりは背の高い、これもあんまり安つぽくねえ野郎です。相当に道楽もした奴らだとみえて、茶代の置きつ振りも悪く無し、女を相手に鯛や鯨の話をしているほどの国者くにものでも無し、実はお吉なんぞはその色の小白い方に少しぼうと来ているらしいんで……。呆れるじゃありませんか。それですから奴らが二階でどんな相談をしているか、お吉に訊いてもどうも正直に云わねえようです。私がきようそつと階子はしごの中途まで昇つて行つて、奴らがどんな話をしているかと、耳を引つ立てていると、一人の奴が小さい声で、『無暗に斬つたりしてはいけない。素直に云うことを肯きげばよし、ぐずぐず云つたら仕方がない、嚇かして取つ捉まえるのだ』と、こう云っているんです。ねえ、どうです。これだけ聞いても碌な相談でないことは判ろうじやありませんか」

「むむ」と、半七はまた考えた。

黒船の帆影が伊豆の海を驚かしてから、世の中は漸次しだいにさわがしくなった。夷狄いてきを征伐する軍用金を出せとか云つて、富裕ものもちの町家を嚇してあるく一種の浪人組が近頃所々に徘徊はいかい

岡本綺堂

する。しかも、その中にほんとうの浪人は少ない。大抵は質たちの悪い御家人どもや、お城坊主の道楽息子どもや、或いは市中の無頼漢ならずものどもが、同気相求むる徒党を組んで、軍用金などという体裁の好い名目みょうもくのもとに、理不尽の押借りや強盗を働くのである。熊蔵の二階を策源地としているらしい彼の二人の怪しい武士も、或いはその一類ではないかと半七は想像した。

「じゃあ、なにしろ明日あしたおれが見とどけに行こうよ」

「お待ち申しています。午ひるごろならば奴らも間違いなく来ていますから」と、熊蔵は約束して帰った。

あくる朝は七草粥がゆを祝って、半七は出がけに八丁堀同心の宅へ顔を出すと、世間がこのごろ物騒がしいに就いて火付盗賊改めが一層嚴重になった、その積りで精々御用を勤めろという注意があつた。これが半七を刺戟して、いよいよ彼の注意を熊蔵の二階に向けさせた。彼がそれからすぐに愛宕下の湯屋へ急いで行つたのは朝の四ツ半（十一時）頃で、往來には遅い回礼者がまだ歩いていて、獅子はやしの囃子も賑やかにきこえた。

裏口からそつとはいると、熊蔵は待つていた。

岡本綺堂

「親分、ちようど好い処です。一人の野郎は来ています。なんでも湯にへえつているようです」

「そうか。それじゃ俺も一ツ風呂泳いで来ようか」

半七は更に表へ廻つて、普通の客のように湯銭を払つてはいると、まつ昼間の銭湯せんとうはすいていた。武者絵を描いた柘榴口ざくろぐちのなかで都々逸の声は陽気らしくきこえたが、客は四、五人に過ぎなかった。半七は一と風呂あたたまるとすぐに揚がつて来て、着物を肌引つ掛けたままで二階へあがると、熊蔵もあとからそつと付いて来た。

「あの、水槽みずぶねに近いところにいた奴だろう」と、半七は茶を飲みながら訊いた。

「そうです、あの若けえ野郎です」

「あれは偽者じゃあねえ」

「ほんとうの武士さむらいでしょうか」

「足を見ろ」

武士は常に重い大小をさしているの、自然の結果として左の足が比較的ひかくてきに発達している。足首も右より大きい。裸で見届けたのだから間違いはないと半七は云つ

た。

「じゃあ、御家人でしようか」

「髪の結いようが違う。やつぱり何処かの藩中だろう」

「なるほど」と、熊蔵はうなずいた。「そこで親分。きようは彼奴らあいつが何だか風呂敷包みのようなものを重そうに抱えて来て、お吉に預けている処をちらりと見たんですが。ちよいとあらた検めて見ましようか」

「そういえば、お吉は見えねえようだが、どうした」

「今時分は閑ひまなもんだから、子供のように表へ獅子舞を見に行つたんですよ。ちようど誰もいねえから一応あらためて置きましよう。又どんな手がかりが見付からねえとも限りませんから」

「そりゃあそうだ」

「なんでもお吉が受け取つて、貸し切りの着物棚のなかへ押し込んだようでしたが……。まあ、お待ちなせえ」と、熊蔵はそこらの戸棚を探して、一つの風呂敷包みを持ち出して来た。濃い藍染めの風呂敷をあけると、中には更に萌黄の風呂敷につつんだ二個の箱のよ

岡本綺堂

うなものが這入つていた。

「ちよいと下を見てきますから」

熊蔵は階子はしこを降りて、又すぐに昇つて来た。

「あいつがもし湯から揚がったら、咳払いをして知らせるように、番台の奴に云いつけて置きましたから大丈夫です」

二重につつんだ風呂敷の中からは、一種の溜め塗りのような古い箱が二個あらわれた。箱は能楽の仮面めんを入れるようなもので、底から薄黒い平打ちの紐ひもをくぐらせて、蓋ふたの上で十文字に固く結んであった。幾分の好奇心も手伝つて、熊蔵は急いでその一つの箱の紐を解いた。

蓋をあけても中身はすぐに判らなかつた。中にしまつてある品は、魚の皮とも油紙とも性の得知れない薄黄色いものに固く包まれていた。

「べらぼうに嚴重だな」

包みを解いて熊蔵は思わずあつと叫んだ。ふたりの眼の前に現われたものは人間の首であつた。併しそれは幾千百年を経過したか容易に想像することを許さないほどに枯れ切つ

岡本綺堂

た古い首で、皮膚の色は腐った木の葉のように黒く黄ばんでいた。半七や熊蔵の眼には、それが男か女かすらも殆ど判断が付かなかつた。

二人は息を嚙^のんで、この奇怪な首をしばらく見つめていた。

「親分。こりゃあ何でしょう」

「判らねえ。なにしろ、そつちの箱を明けてみる」

熊蔵は無気味そうに第二の箱をあけると、その中からも油紙のようなものに鄭重に包まれた一個の首が転げ出した。併しそれは人間の首でなかった。短い角つのと大きい口と牙きばをもつていて、龍とも蛇とも判断が付かないような一種奇怪な動物の頭であった。これも肉は黒く枯れて、木か石のように固くなっていた。

奇怪な発見がこんなが続いて、二人は少なからずおびやかされた。

熊蔵は彼を香具師やかしだろうと云った。得体えたいのわからない人間の首を持ちあるいて、見世物の種にでもするのだろうと解釈した。しかし飽くまでも彼を武士と信じている半七は、素直にその説を受け入れることが出来なかつた。それならば彼はなんの為にこんなものを抱え歩いているのだらう。しかも何故それを湯屋の二階番の女などに軽々しく預けて置くのであらう。この二品は一体なんであらう。半七の知恵でこの謎を解こうとするのは頗る困

岡本綺堂

難であった。

「こいつあいけねえ、ちよつとはなかなか判らねえ」

番台で咳払いをする声がきこえたので、二階の二人はあわててこの疑問の二品を箱へしまつて、着物戸棚へ元のように押し込んで置いた。獅子の囃子も遠くなつて、お吉は外から帰つて来た。武士も濡れ手拭をさげて二階へ昇つて来た。半七は素知らぬ顔をして茶を飲んでいた。

お吉は半七の顔を識つていたので、武士にそつと注意したらしい。彼は隅の方に坐つたままで何も口を利かなかつた。熊蔵は半七の袖をひいて、一緒に下へ降りて来た。

「お吉が変な目付きをしたんで、野郎すつかり固くなつて用心しているようだから、きょうはとでも駄目だろう」と、半七は云つた。

熊蔵は忌々しいまいまそうにささやいた。「なにしろ、あの二品をどうするか、私がよく氣をつけています」

「もう一人の奴というのはまだ来ねえんだね」

「きょうはどうしたか遅いようですよ」

「なにしろ気をつけてくれ、頼むぜ」

半七はそれから赤坂の方へ用達ようたしに廻った。初春の賑やかな往来をあるきながらも、彼は絶えずこの疑問の鍵をみいだすことに頭を苦しめたが、どうも右から左に適当な判断が付かなかつた。

「まさか魔法使いでもあるめえ。あんな物を持ち廻つて、何か祈祷まじなか呪いでもするか、それとも御禁制の切支丹か」

黒船以来、宗門改めも一層嚴重になっている。もしかれらが切支丹宗門の徒であるとするれば、これも見逃がすことは出来ない。どつちにしても眼を放されない奴らだと半七はかんがえていた。赤坂から家へ帰つて、その晩は無事に寝る。と、あくる朝のまだ薄暗いうち、かの湯屋熊が又飛び込んで来た。

「親分、大変だ。大変だ。あいつらがとうとう遣りやがった。こつちの手遅れで口惜しいことをしてしまつた」

熊蔵の報告によると、ゆうべ同町内の伊勢屋という質屋へ浪人風の二人組の押し込みがはいつて、例の軍用金を云い立てに有り金を出せと云つた。こつちで素直に渡さなかつた

岡本綺堂

ので、かれらは大刀をふり廻して主人と番頭に手を負わせた。そうして、そこらに有合わせた金を八十両ほど引つさらって行つた。覆面していたから判然とは判らないが、かれらの人相や年頃が彼の二人の怪しい武士に符合していると、熊蔵は付け加えた。

「どうしても彼奴らですよ。わっしの二階を足溜りにして奴らはそこらを荒して歩くつもりに相違ありませんぜ。早く何とかしなけりやあなりますめえ」

「そいつは打捨つて置けねえな」と、半七も考えていた。

「打捨つて置けませんとも……。そのうちに他から手でも着けられた日にゃあ、親分ばかりじゃねえ、この湯屋熊の面が立ちませんからね」

そう云われると、半七も落ち着いていられなくなつた。自分が一旦手を着けかけた仕事を、ほかの者にさらって行かれるのは如何にも口惜しい。と云つて、無証抛のものを無暗に召捕るわけには行かなかつた。まして相手は武士である。迂濶に手を出して、飛んだ逆捻を食つてはならないと思つた。

「なにしろ、おめえは家へ帰つて、その武士がきよう来るかどうか気をつけろ。おれも支度をしてあとから行く」

熊蔵を帰して、半七はすぐに朝飯を食った。それから身支度をして愛宕下へ出かけて行つたが、その途中に少し寄り道をする用があるので、日蔭町の方へ廻つてゆくと、会津屋という刀屋の前に一人の若い武士が腰を掛けて、なにか番頭と掛け合つてゐるらしかつた。ふと見ると、その武士はきのう湯屋の二階で初めて出逢つた怪しい箱の持ち主であつた。

半七は立ち停まつてじつと視てみると、武士はやがて番頭から金をうけ取つて、早々にこの店を出て行つた。すぐにその後を尾おけようかとも思つたが、なにか手がかりを探り出すこともあろうと、彼は引つ返して会津屋の店へはいつた。

「お早うございます」

「神田の親分、お早うございます」

番頭は半七の顔を識つていた。

「春になつてから馬鹿に冷えますね」と、半七は店に腰をかけた。「つかねえことを訊き申すようだが、今ここを出た武家はお馴染なじみの人ですかえ」

「いいえ、初めて見えた方です。こんなものを持ち歩いて、そこらで二、三軒ことわられ

岡本綺堂

たそうですが、とうとう私の家へ押し付けて行ってしまったんですよ」と、番頭は苦笑いをしていた。その傍には何か油紙に包んだ硬^{こわ}ばった物が横たえてあった。

「何ですえ、それは……」

「こんなもので……」

油紙をあけると、そのなかから薄黒い泥まぶれの魚のようなものが現われた。それは刀の柄^{つか}や鞘を巻く泥鯨であると番頭が説明した。

「鯨の皮ですか。こうして見ると、随分きたないもんですね」

「まだ仕上げの済まない泥鯨ですからね」と、番頭はそのきたない鯨の皮を打返して見せた。

「御承知の通り、この鯨の皮はたいい異国の遠い島から来るんですが、みんな泥だらけのまま送って来て、こつちで洗ったり磨いたりして初めてまっ白な綺麗なものになるんですが、その仕上げがなかなか面倒^{めんどう}ですね。それに迂濶^{うっかり}するとひどい損をします。なにしろこの通り泥だらけで来るんですから、すっかり仕上げて見ないうちは、傷があるか血^{ちじみ}暈があるか能く判りません。傷はまあ好いんですが、血暈という奴がまことに困るんです。

なんでも鮫を突き殺した時に、その生血なまちが皮に沁み着くんだそうですが、これが幾ら洗つても磨いても脱ぬけないので困るんです。まっ白な鮫の肌うろしに薄黒い点が着いていちやあ売物になりませんからね。勿論そういうものは漆うるしをかけて誤魔ごまかしますが、白鮫にくらべると半分値にもなりません。十枚も束たばになつていの中には、きつとこの血暈のある奴が三、四枚ぐらい混まじつていますから、こつちもそのつもりで平均の値で引き取るんですが、どうしても仕上げて見なければ、その血暈が見付からないんだから困ります」

「成程ねえ」と半七も感心したようにうなずいてみせた。この薄ぎたない鮫の皮が玉のように白く美しい柄巻まきになろうとは、素人にちよつと思ひ付かないことであつた。

「あのお武家が、これを売りに来たんですかえ」と、半七は鮫の皮を打ち返して見た。

「長崎の方で買ったんだそうで、相当の値段に引き取ってくれという掛け合あひいなんです。わたしの方も商売ですから引き取つてもいいんですが、いくらお武家でも素人の持つて来たものは何だか不安ですし、おまけにこのとおりの泥鮫で、たつた一枚というんですから、もし血暈でも付いている奴を背負い込んだ日にや迷惑ですからね。まあ一旦は断ことわつたんですが、幾らでもいいからと頻りに口説かれて、とうとう廉やすく引き取るようなことに

なりまして……。あとで主人に叱られるかも知れません。へへへへへへ」

余程ひどく踏み倒したと見えて、番頭はその引き取り値段を云わなかった。半七の方でも訊かなかつた。それにしても彼の武士が持つて来るものは、どれもこれも変なものばかりである。第一に干枯ひからびた人間の首、奇怪な動物の頭、それからこのきたない泥鯨の皮……。どうしてもこれには仔細がありそうに思われた。

「いや、どうもお邪魔をしました」

小僧が汲んで来た番茶を一杯飲んで、半七は会津屋の店を出た。それからすぐに愛宕下の湯屋へゆくと、熊蔵は待ち兼ねたように飛び出して来た。

「親分、きのうの若けえ野郎は先刻さつきちよいと来て、又すぐに出て行きましたよ」

「なにか抱えていやしなかつたか」

「なんだか知らねえが、長つ細い風呂敷包みを持つていましたよ」

「そうか。おれは途中でそいつに逢つた。そこでもう一人の方はどうした」

「背の高い奴はきょうも来ませんよ」

「じゃあ、熊。気の毒だがその伊勢屋とかいう質屋へ行つて、金のほかに何を奪とられた

岡本綺堂

か、よく訊いて来てくれ」

こう云い置いて二階へあがると、火鉢の前にお吉がぼんやり坐っていた。半七が二日もつづけてくるので、彼女もなんだか不安らしい眼付きをしていたが、それでも笑顔を粧つて愛想よく挨拶した。

「親分、いらつしやいませ。どうもお寒うございますこと」

茶や菓子を出して頻りにちやほやするのを、半七は好い加減にあしらいながら先ず煙草を一服すつた。それから毎日邪魔をするからと云つて幾らかの銀を包んでやった。

「毎度ありがとうございます」

「時におふくろも兄貴も達者かえ」

お吉の兄は左官で、阿母はもう五十を越しているということ半七は識っていた。

「はい、おかげさまで、みんな達者でございます」

「兄貴はまだ若いから格別だが、阿母はもう好い年だそうだ。むかしから云う通り、孝行をしたいた時には親は無しだ。今のうちに親孝行をたんとしておく方がいいぜ」

「はい」と、お吉は顔を紅くして俯向いていた。

それがなんだか恥かしいような、気が咎めるような、おびえたような風にも見えたので、半七も畳みかけて冗談らしくこう云った。

「ところが、この頃はちつと浮気を始めたという噂だぜ。ほんとうかい」

「あら、親分……」と、お吉はいよいよ顔を紅くした。

「でも、去年から遊びにくる二人連れの武士の一人と、おめえが大変心安くすると云つて、だいぶ評判が上げえようだぜ」

「まあ」

「何がまあだ。そこでお前に訊きてえのは他じゃねえ。あのお武士衆は一体どこのお屋敷だえ。西国の衆らしいね」

「そんな話でございますよ」と、お吉はあいまいな返事をしていた。

「それからおめえ気の毒だが、そのうちに番屋へちよいと来てもらうかも知れねえから、そのつもりでいてくんねえよ」

嚇すように云われて、お吉はまたおびえた。

「親分。なんの御用でございます」

岡本綺堂

「あの二人の武士に就いてのことだが、それとも番屋まで足を運ばねえで、ここで何もかも云ってくれるかえ」

お吉はからだを固くして黙っていた。

「え、あの二人の商売はなんだえ。いくら勤番者だって、暮も正月も毎日毎日湯屋の二階にばかり転がっている訳のものじゃあねえ。何かほかに商売があるんだろう。なに、知らねえことはねえ。おめえはきつと知っている筈だ。正直に云ってくんねえか。一体あの戸棚にあずかつてある箱はなんだえ」

紅い顔を水色に染めかえて、お吉はおどおどしていた。

こんな商売をしていながら、割合に人摺^ずれのしていないお吉は、半七に嚇されてもう息も出ないくらい顫え上がっていた。しかし彼の武士たちの身許^{みもと}はどうしても知らないと言った。なんでも麻布辺にお屋敷があるということだけは聞いているが、そのほかにはなんにも知らないと言情を張っていた。それでも半七に嚇したり賺^{すか}したりされた挙句に、お吉はようようこれだけのことを吐いた。

「なんでもあの人達は仇討^{かたきうち}に出ているんだそうでございます」

「かたき討……」と半七は笑い出した。「冗談じゃあねえ。芝居じゃああるめえし、今どきふたり揃って江戸のまん中で仇討もねえもんだ。だが、まあいいや、かたき討なら仇討として置いて、あの二人の居どこはまったく知らねえんだね」

「まったく知りません」

この上に責めても素直に口を開きそうもないので、半七もしばらく考えていると、熊蔵が階子^{はしこ}のあがり口から首を出してあわただしく呼んだ。

「親分。ちよいと顔を貸しておくんなせえ」

「なんだ。そうぞうしい」

わざと落ち着き払って、半七は階子を降りてゆくと、熊蔵は摺り寄つてささやいた。

「伊勢屋じゃあ金のほかに、べんべら物を三枚と鮫の皮を五枚奪られたそうです」

「鮫の皮……」と、半七は胸を躍らせた。「それは泥鮫か、仕上げの皮か」

「さあ、そりゃあ訊いて来ませんでしたか……。もう一遍きいて来ましょうか」

熊蔵は又急いで出て行つた。やがて引つ返して来て、それはみな磨きの白い皮で、露月町の柄巻師から質に取つたものだと言報告した。泥鮫でないと聞いて、半七はすこし^{あて}的がはずれた。彼はゆうべ伊勢屋へ押し込んだ浪人者と、きょう泥鮫を売りに来た武士とを、結びつけて考えることが出来なくなつてしまった。

「どうも判らねえ」

なにしろもう午に^{ひる}近くなつたので、半七は熊蔵を連れて近所へ飯を食いに行つた。

「あのお吉の奴は、よつぽどあの武士^{さむれえ}の一人にござつてゐるらしいな」と、半七は笑いながら云つた。

岡本綺堂

「そうです。そうです。それですからどうも巧く行かねえんですよ。あいつ思うさま嚇かしてやりましょうか」

「いや、おれも好い加減おどかして置いたから、もうたくさんだ。あんまり嚇かすと却つて碌なことはしねえもんだ。まあ、もう少し打っちゃつて置け」

二人は銜え楊枝くわで帰つて来ると、一人の若い武士が湯屋の暖簾をくぐつて出るのを遠目に見つけた。彼はさつき日蔭町へ泥鯨を売りに行つた武士に相違なかつた。彼は蒨黄の風呂敷につつんだ一個の箱のようなものを大事そうに抱えているらしかつた。

「あ、野郎が来ましたよ。あの箱を一つ抱え出したらしゆうがすぜ」と、熊蔵は眼をひからして伸び上がった。

「ちげえねえ。すぐ尾つけてみる」

「よがす」

熊蔵はすぐに彼のあとを尾けて行つた。半七は引つ返して湯屋にはいつて、念のために二階にあがつて見ると、お吉の姿がいつの間にか消えていた。更に戸棚をあらためると、かの怪しい二つの箱も見えなかつた。

「みんな持ち出してしまいやあがつたな」

二階を降りて来て番台の男に訊くと、お吉はたつた今階子を降りて奥へ行つたらしいと云うので、半七もつづいて奥へ行つた。釜の下を焚たいている三助の話によると、お吉はちよいとそこまで行つて来ると云つて、そそくさと表へ出て行つたとのことであつた。

「なにか抱えていやしなかつたか」

「さあ、知りましねえ」

山出しの三助はぼんやりしていて何も気がつかなかつたのである。半七は思わず舌打ちした。自分達が飯を食くに行つている間に、丁度かの武士が来たので、お吉はかれと謀しめし合あわせて、めいめいに秘密の箱を一つずつかかえて、裏と表から分かれ分かれに脱け出したに相違ない。一と足違いで飛んでもないどじを踏んだと、半七は自分の油断をくやんだ。

「こうと知つたら、いつそお吉の奴を引き揚げて置けばよかつた」

彼はまた引つ返して、番台の男にお吉の家を訊ういた。明神前の裏に住んでいると云うので、すぐにそこへ追つてゆくと、兄は仕事に出て留守であつた。正直そうな母が一人で

岡本綺堂

檻ぼろ褌をつづくついで、お吉は今朝いつもの通りに家を出たぎりはまだ帰らないと云つた。母の顔色には嘘は見えなかった。狭い家であるから何処にも隠れている様子もなかった。半七はまた失望して帰った。帰ると、やがて熊蔵も詰まらなそうな顔をして帰つて来た。

「親分、いけねえ、途中で友達に出つくわして、ちよいと一言話しているうちに、奴はどこかへか消えてしまやあがつた」

「馬鹿野郎。御用の途中で友達と無駄話をしている奴があるか」
今更叱つても追つ付かないので、半七はじりじりして来た。

「泣いても笑つても今日はもう仕方がねえ。お吉の奴が家へ帰るかどうだか能く気をつけていろ。それからもう一人の武士が来たらば、今度こそしつかりと後をつけて、よくその居どこを突き留めて置け。てめえの種出しじゃあねえか、少し身を入れて働け」

その日はそのまま別れて帰つたが、なんだか疝かんが昂ぶつて半七はその晩おちおち寝付かれなかった。明くる朝はひどく寒かった。彼はいつもの通りに冷たい水で顔を洗つて家を飛び出すと、朝日のあたらぬ横町は鉄のように凍つて、近所の子供が悪戯いたずらにほうり出し

た隣りの家の天水桶の氷が二寸ほども厚く見えた。

半七は白い息を噴きながら、愛宕下へ急いで行つた。

「どうだ、熊。あれぎり変つたことはねえか」

「親分。お吉の奴は駄け落ちをしたようですよ。とうとうあれぎりて家へ帰らねえそう

で、今朝おふくろが心配らしく訊きに来ましたよ」と、熊蔵は顔をしかめてささやいた。

「そうか」と、半七の額にも太い皺が描かれた。「だが、まあ仕方がねえ。もう一日気長

に網を張つていてみよう。もう一人の奴がやつて来ねえとも限らねえから」

「そうですねえ」と、熊蔵は張り合い抜けがしたようにぼんやりしていた。

半七は二階にあがると、けさはお吉がいないので其処には火の気もなかつた。熊蔵の女房が言い訳をしながら火鉢や茶などを運んで来た。朝のあいだは二階へあがる客もないので、半七は煙草をのみながら唯ひとりつくねんと坐つてみると、春の寒さが襟にぞくぞくと沁みて来た。

「お吉の奴め、この頃は浮わついているんで、障子も碌に貼りやあがらねえ」と、熊蔵は窓の障子の破れを見かえりながら舌打ちした。

半七は返事もしないで考えつめていた。おととい此の二階で発見した人間の首、動物の頭、きのう日蔭町で見た泥鰌の皮、それが一つに繋がって彼の頭の中を走馬燈まわりどうろのようにくるくと駆け廻っていた。魔法つかいか、切支丹か、強盗か、その疑いも容易に解決しなかった。それに付けても、昨日かの武士の後を尾け損じたのが残念であった。熊蔵のようなどじを頼まずに、いつそ自分がすぐに尾けて行けばよかつたなどと、今更のように悔まれた。

親分の顔色が悪いので、熊蔵も手持無沙汰で黙っていた。芝の山内の鐘がやがて四ツ（午前十時）を打った。下の格子があいたと思うと、番台の男が「いらつしやい」と、挨拶する声につづいて、二階に合図をするような咳払いの声がきこえた。二人は顔を見あわせた。

「野郎。来たかな」と、熊蔵があわてて起つて下をのぞく途端に、背の高い一人の若い武士が刀を持って階子を足早にあがって来た。

「おあがり下さいまし。毎日お寒いことでございます」と熊蔵はわざと笑顔を粧つくつて挨拶した。

「どうぞこちらへ。けさは女が休んだものですから、二階も散らかって居ります」
「女は休んだか」と、武士は刀掛けに大小をかけながらちよつと首をひねった。そうして、

「お吉は病気かな」と、仔細ありげに訊いた。

「さあ、まだ何とも云つてまいりませんが、流行感冒はやりかぜでも引いたんでございましょう」
武士は黙つてうなずいていたが、やがて着物をぬいで階子を降りて行つた。

「あれが連れの奴か」と、半七が小声で訊くと、熊蔵は眼でうなずいた。

「親分、どうしましょう」

「まさか、いきなりにふん縛るわけにも行くめえ。まあ、ここへ上がつて来たら、てめえがなんとか巧く云つて連れの武士さむらいのことを訊いてみる。その返事次第でまた工夫もあるだろう。なにしろ相手が武士だ。無暗に振りまわされるとあぶねえから、その大小はどこへか隠してしまえ」

「そうですね。誰か加勢に呼びましようか」

「それにも及ぶめえ。多寡が一人だ。何とかなるだろう」と、半七はふところの十手を

岡本綺堂

探った。

二人は息を嚙^のんで待ち構えた。

四

「いや、馬鹿なお話ですね」と、半七老人は笑いながらわたしに話した。

「今考えると実にばかばかしい話で、それからその武士のあがつて来るのを待っていて、熊蔵がそれとなくいろいろのことを訊くと、どうもその返事が曖昧で、なにか物を隠しているらしく見えるんです。わたくしも傍から口を出してだんだん探ってみたんですが、どうも腑に落ちないことが多いんです。こつちももう焦^じれて来たので、とうとう十手を出しましたよ。いや、大しくじりで……。はははは。なんでも焦^{あせ}つちやいけませんね。そうすると、その武士も切羽詰まったとみえて、ようよう本音を吐いたんですが、やつぱりお吉の云った通り、その二人の武士は仇討でしたよ」

「かたき討……」と、わたしは思わず訊き返すと、半七老人はにやにや笑っていた。「まったく仇討なんですよ。それが又おかしい。まあお聴きなさい」

半七に十手を突き付けられた武士は梶井源五郎といって、西国の某藩士であった。去年の春から江戸へ勤番に出て来て、麻布の屋敷内に住んでいたが、道楽者のかれは朋輩の高

島弥七と特別に仲好くして、吉原や品川を遊びまわっていた。もうだんだんに江戸に馴れて来た彼等は、去年の十一月のはじめに同じ家中の神崎郷助と茂原市郎右衛門のふたりを誘い出して、品川のある遊女屋へ遊びに行つた。その席上で神崎と茂原とが酒の上から口論をはじめたのを、梶井と高島とがともかくも仲裁してその場は無事に納まつたが、神崎はやはり面白くないと見えて、すぐに帰ると云い出した。もう屋敷の門限も過ぎているのであるから、いつそ今夜は泊つて帰れと、仲裁者の二人がしきりに引留めたが、どうしても帰ると強情を張つた。

彼ひとりを先に帰すわけにも行かないので、結局四人が連れ立つて出ることになつた。高輪たかなわの海岸にさしかかったのは夜の五ツ（午後八時）を過ぎた頃で、暗い海に漁船の篝火かがりびが二つ三つ寂しく浮かんでいた。酔いを醒ます北風が霜を吹いて、宿しゆくへ急ぐ荷馬の鈴の音が夜の寒さを揺り出すようにも聞えた。さつきから黙つてあるいていた神崎は、このとき一と足退がつてだしぬけに刀を抜いたらしい。なにか暗いなかに光つたかと思うと、茂原はあつと云つて倒れた。神崎はすぐに刀を引いて、一散走りに芝の方角へばたばたと駆け行つてしまつた。梶井と高島は呆氣あつけに取られて、しばらく突つ立っていた。茂原は右の

肩からうしろ袈裟に斬り下げられて、ただ一刀で息が絶えていた。もうどうすることも出来ないで、二人は茂原の死骸を辻駕籠にのせ、夜ふけに麻布の屋敷までそつと運んで行った。悪場所で酔狂の口論、それが原因で朋輩を殺めるなどは重々の不埒とあつて、屋敷でもすぐに神崎のゆくえを探索させたが、五日十日を過ぎても何の手がかりもなかった。茂原には市次郎という弟があつて、それがすぐに兄の仇討を屋敷へ願ひ出た。

かたき討は許可された。しかし表向きに暇をやることはならぬ、兄の遺骨を郷里へ送る途中で仏寺に参詣し、または親戚のもとへ立ち寄ることは苦しからずといふのであつた。つまり仏寺に参詣とか親戚を訪問とかいう名義で、仇のゆくえを尋ねあるくことを許されたのである。弟はありがたき儀とお礼を申し上げて、兄の遺骨をたずさえて江戸を出発した。

関係者の梶井と高島とは、遊里に立入つて身持よろしからずといふのでお叱りを受けた。殊に当夜刃傷のみぎり、相手の神崎を取り逃がしたるは不用意の致し方とあつて、厳しいお咎めを受けた。しかもその過怠として仇討の助太刀を申し付けられた。但し他国へ踏み出すことはならぬ。江戸四里四方を毎日たずねあるいて、百日のあいだに仇の在所ありかを

さがし出せというのであった。

仇の神崎が果たして江戸に隠れているかどうかは疑問であったが、この嚴命を受けた彼等は毎日あけ暁六ツから屋敷を出て夕六ツまで江戸中を探し歩かなければならなかった。はじめの十日ほど正直に根好く江戸中を歩きまわっていたが、この難儀な役目には彼等もだんだんに疲れて来た。しまいには二人が相談して、毎朝いつもの時刻に屋敷の門を出ながら、そこらの水茶屋や講釈所や湯屋の二階にはいり込んで、一日をそこに遊び暮すという横着なことを考え出すようになった。きのうは浅草の盛り場へ行つたとか、きょうは本郷の屋敷町をまわつたとか、屋敷の方へは好い加減の報告をして、彼等はどこかで毎日寝転んで遊んでいた。仇のありかは勿論知れよう筈はなかつた。

毎日遊び歩いているのであるから、彼等もなるたけぜに錢の要らない場所を選ばなければならなかつた。彼等は結局この湯屋の二階を根城ねしろとして、申し訳ばかりに時々そこらを出て歩いていた。そのうちに一方の高島の方は二階番のお吉と仲好くなり過ぎてしまった。仇討なんぞはあぶないからお止よしなさいと、女がしきりに心配して制とめるようになった。

こんなことをしていた処で、仇のありかはとも知れそうもない。万一知れたところ

岡本綺堂

で、尋常に助太刀の務めを果たすほどのしつかりした覚悟をもっていない彼等は、時の過ぎゆくに従って自分たちの行く末を考えなければならなかった。百日の期限が過ぎて仇のゆくえが知れない暁には、自分たちの不首尾は眼に見えている。一体江戸にいるか居ないか確かに判りもしないものを、日限を切つて探し出せというのが無理であるが、それも屋敷の命令であるから仕方がない。まさかに長の暇なが いとまにもなるまいとはいうものの、身持放埒とかいうような名義のもとに、国許へ追い返されるぐらいのことは覚悟しなければならぬ。毎日うかうかと遊んでいる間にも、この不安が重い石のように彼等の胸をおしつけていた。

「いつそおれは浪人する」と、高島は云い出した。彼のうしろにはお吉という女の影が付きまつわっていた。国へ追い返されると、もう彼女に逢えないというのを高島は恐れていた。しかし高島ほど根強い理由をもっていない梶井は、国へ返されるのを恐れながらも、さすがに思い切つて浪人する気にもなれなかった。かれは独身者ひとりものの高島と違つて、故郷に母や兄や妹をもつていた。

「まあ、そんな短気を出すな」と、彼は高島をなだめていた。しかし今年の春になつてか

ら、高島はいよいよその決心を固めたらしく、毎朝屋敷を出るときに、自分の大事の手道具などを少しずつ抱え出して、お吉のもとへそつと運び込んでいるらしかった。そのうちに湯屋の亭主もだんだんに眼をつけ始めた。この亭主は岡つ引の手先であるということをお吉もささやいた。この際つまらない疑いなどを受けてはいよいよ面倒と思つた彼は、もう落ち着いていられないような心持になつて、女と相談してどこへか一緒に姿を隠したらしく、ゆうべは屋敷へ戻つて来ないので、梶井も心配して今朝ここへ探しに来たのであつた。

かたき討の理由も、駈落ちの理由も、それですつかり判つた。それにしても、高島がお吉に預けて置いた疑問のふた品はなんであろう。

「あれは高島が家重代の宝物でござる」と、梶井は説明した。

豊臣秀吉が朝鮮征伐のみぎりに、高島が十代前の祖先の弥五右衛門は藩主にしたがつて渡海した。その時に分捕りして持ち帰つたのが彼の二品で、干^{ひから}枯びた人間の首と得体の知れない動物の頭と——それは朝鮮の怪しい巫女^{みこ}が、まじないや祈^ひ禱の種に使うもので、殆ど神のよう^うにうやうやしく祀られていたものであつた。余り珍らしいので持ち帰つたが、

誰にもその正体は判らなかつた。ともかくも一種の宝物として高島の家には伝えられていて、藩中でも誰知らぬ者もない。梶井も一度見せられたことがある。今度屋敷を立退くに就いても、まずこの奇怪な宝物をお吉にあずけて置いたものと察せられた。

泥鯨の方は梶井も知らないと言つた。しかし高島の祖父という人は久しく長崎に詰めていたことがあるから、おそらくその当時に異国人からでも手に入れたものであろうとのことであつた。泥鯨は金になるから売つてしまつたが、他の二品は買い手もない。殊に家に伝わる宝物であるから、女と一緒にかかえて行つたものであろう。人間の首と龍の頭とを抱えて、若い男と女とは何処へさまよつて行つたか。思えばおかしくもあり、哀れでもあり、実に前代未聞の道行みちゆきといふのほかはなかつた。

「今でこそ話をすれ、その時にはわたくしも引つ込みが付きませんでしたよ」と、半七老人は再び額を撫でながら云つた。「なまじ十手を振り廻したり何かしただけに猶々始末が付きませんや。でも、梶井という武士も案内さばけた人で、一緒に笑つてくれましたから、まあ、まあ、どうにか納まりは付きましたよ。片方の高島という武士はそれぎり屋敷へ帰らなかつたそうです。お吉も音沙汰がありませんでした。二人は道行を極めて、なんでも

岡本綺堂

神奈川辺に隠れているとかいう噂もありましたが、その後どうしましたかしら。肝腎のかたき討の方は、これもどうなったか聞きませんでした。梶井という人は国へも追い返されないので、その後にも湯屋の二階へときどき遊びに来ました。質屋へはいつた浪人はまったく別物で、それは後に吉原で御用になりました。明治になつてから或る人に訊きますと、そのおかしな人間の首というのは多分木乃伊ミイラのたぐいだろうという話でしたが、どうですかねえ。なにしろ、よつぽど変なものでした」



半七捕物帳 04 湯屋の二階
岡本綺堂 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本:「時代推理小説 半七捕物帳 (一)」光文社文庫、光文社
1985 (昭和 60) 年 11 月 20 日初版 1 刷発行
※ 「四ッ」と「四ツ」の混在は、底本通りにしました。

入力 : tatsuki

校正 : 小林繁雄

2002 年 5 月 15 日作成

2004 年 2 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル :

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)
+ Omni Graffle Professional 5.2.1(表紙)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ明朝 Pro W3